

中国文化における色彩の象徴的意味に関する考察

——中国語の言語用例を中心にして——

水原 寿里*

A Study on the Symbolic Meaning of Colors in Chinese Culture

Juri Mizuhara

要 旨 人間はその長い歴史の流れの中で、文化や文明を発展させたが、言葉の表現においても時代とともに変遷が見られる。社会全体が豊かになると、言葉の表現も豊かになり、同時に単語の意味も多様性を帯びてくる。表の意味と裏の意味、また喩えなどにその豊かさが現れてくる。

本稿の目的は、長い歴史の潮流の中で、文化的・政治的・社会的・宗教的な諸要因により、「色」に対する中国語の用語用例がどう変遷したかを考察することにある。中国は国土が広いので、各地域の風土・風俗習慣、また民族性などの特色が、色彩の特色ともなって現れる。色の解釈によって、中国語に含まれるニュアンスを正しく理解し、それを正確に使用したり、また各地域を一層よく理解したりするために、色の言語用例に基づいて、その表層の意味（陽としての、賛美し褒め称えるニュアンス）と、深層の意味（陰としての、皮肉・非難咎めのニュアンス）の二面から考察する。

はじめに

『荀子』の「勸学篇」には、真に学問を究めると、目は、青・黄・赤・白・黒の五つの美しい色彩にとらわれなくなる、つまり、目先の変化に惑わされなくなる、との意味が述べられている¹⁾。日本の古典『竹取物語』でも、かぐや姫が、求婚してきた五人の貴公子の一人、大伴大納言に出した要求は、「龍の首に五色の光る玉あり。それを取りて賜へ」であった。また、七夕祭りの歌に「五色のたんざく……」という歌詞もある。このように、同じ五つの色を用いながらも、昔から人類がそれぞれ違う自然環境の中で色に託した意味は様々であった。

中国語は古典の詩の用語においても、現代の日常生活の用語においても、色に関する言葉なしでは成り立たない。たとえば、『詩経』の中の「秦風」に収められている民歌に、「蒹葭蒼蒼白露爲霜」（蒹と葦は青々と茂り、白い露は氷って霜となる）という詩がある²⁾。ここでは、露の透明感を白という「性質形容詞」（後述）で表わして、その美しさを称えている。『荘子』には「紫衣朱冠」（紫の服と赤い冠）の用語が見え、齊の公が狩猟の際に出逢った沼沢の鬼神「委蛇」の様子を述べている³⁾。漢代の民歌を集めた『楽府詩集』の「艶歌羅敷行」の「陌上桑」には、「日出東南隅，照我秦氏楼。秦氏有好女，自名爲羅敷。青絲爲籠糸，紫綺爲上襦。……為人潔白皙」（日は東南の隅よ

* 本学助教 中国語会話・中国語作文

り出で、我が秦氏の楼を照らす。秦氏に好き女あり、みずから羅敷と名づく。青糸を籠の紐と為し、紫の綾を上襦と為す。……人となり潔くしてすがたも白し)とある⁴⁾。ここでは、青・紫・白という「性質形容詞」が女性の内面と外観の美しさを称えるように使われている。

現代文でも、「紅軍 hóng jūn」(赤軍)、「黄色經營 huáng sè jīng yíng」(エロ・グロ製品の生産と経営)、「緑地保護政策 lǜ dì bǎo hù zhèng cè」(環境保護策)、「藍色多瑙河 lán sè duō nǎo hé」(恋愛時の喜怒哀楽)、「黒心腸 hēi xīn cháng」(陰険で悪辣な心根)、「白臉 bái liǎn」(青二才、若僧)、「紫氣東來 zǐ qì dōng lái」(吉祥の到来)、「金玉良言 jīn yù liáng yán」(金言、貴重な言葉・意見)、「銀花 yín huā」(お金)などの表現が常に用いられているが、このような色に関する用語は中国語では形容詞に分類され、熟語として用いられているのが大半である。中国語では「形容詞＋名詞」の形で、形容詞が名詞を修飾するとき、この形容詞が色に関するときは「性質形容詞」と呼び、具体的な状況の描写に用いられる。その具体的な状況の描写により、陽としての、賛美し褒め称えるニュアンスと陰としての、皮肉・非難咎めのニュアンスの二面がある。中国語の色の言語用例の運用において強い表現能力を持ち、鮮明な愛憎と評価の感情を表現する⁵⁾。

本稿では、中国語における色の言語用例を取り上げながら、特に中国文化におけるその言語用例の「表層」の意味と「深層」の意味とのつながりを考察してみたい。

光がプリズムを通過すると、七色の虹が現われる。古来、身の回りの色に対して人間は深い関心を持っている。例えば、「五顔六色 wǔ yán liù sè」は色とりどりで鮮やかなこと、主に色彩豊かな景色や好ましい社会現象を形容するのに用いる。好感的なニュアンスを持っている。従って、どの地域の言葉にも色を指す用語が存在している。未開の民族には特殊な色を顔に塗って、他の集落の人と間違わないように色で区別することがある。地域のほかに、国と国の間でも国旗などに使用する色に対する解釈が違っている。

言葉も、その使われ方によって、同じものが輝きを変えて彩(いろどり)を帯び、表現方法を織り成すことでさまざまな模様を作り出しているところがある。そのような言葉の諸相のあれこれから色について触れた言語用例を取り上げ、中国語の文化背景を調べてみたい。

本稿での研究方法を要約すると、以下の三点に絞ることができよう。

(1) 中国の古典・詩・詞によく使われている色に関する用語を取り出して、その時代の作者の心理状況や当時の環境、および日常生活でよく用いられる熟語・慣用語を通して、表層の意味と、深層の意味の二面性を探る。

(2) 言語社会学の観点から、中国語の地域性による相違、社会全体を取り巻く政治や経済体制の影響、風俗習慣の移り変わりなどに即して、言語用例の生成と消滅を探る。

(3) 古代、現代を問わず、様々な言語用例を分析し、中国語の色で表わされた言葉の代表的な象徴内容を明らかにする。

なお本稿では、論点が複雑になるのを極力さけるために、以下、まず色彩全体について、それから個別に、紅・黄・青・白・黒・紫・金・銀の八つの色彩について、項目を分けて論じてゆきたい。

1. 色彩全体について

中国最古の歌謡集である『詩経』の十五国の「国風篇」を検討してみると、そこに歌われている色彩として、まず赤色の系統として「絳」(深紅色)「赭」(丹色)「朱」などが、青色の系統としては「青」「蒼」「緑」などが、また黒色の系統としては「玄」「緇」などが、白色の系統としては「素」「皤」などが、それぞれ際立っている⁶⁾。

雨上がりの空に美しい「虹」が現れることがある。中国では「虹」を「彩虹 cǎi hóng」と呼ぶ。中国の南朝時代(444-505)の、江淹『江文通集』「麗色賦」において、次のような表現が見られる。「如彩雲出崖，五光徘徊，十色陸離」(虹が崖から見えてきて、五つの光が徘徊し、十の色の光を放っているようである)。つまり、色は心情を表現する象徴語として多用されてきたのである。そのときのイメージには、五つの光と十の色が既にあった。このイメージをさらに歴史的に辿ると、中国古来の「五彩」にゆきあたる。五彩とは、元来、青・黄・赤・白・黒の五種の色を指したものである。現代において、物体色の基本となる色料の三原色と、混合色のための無彩色との合計五色を基本色とする説があるが、これは既に古代中国から存在していた⁷⁾。中国語では、一般に色が多いこと、多彩な色どりを「五彩繽紛 wū cǎi bīn fēn」という。また、「五彩電影 wūcǎidiànyǐng」「五彩電視機 wū cǎi diàn shì jī」「五彩膠卷 wū cǎi jiāo juǎn」は、それぞれカラー映画、カラーテレビ、カラーフィルムのことであるが、ここでも色が五色であることが暗示されている。

中国の京劇に独特な顔のメーキャップは、「臉譜 liǎn pǔ」という。臉譜の図柄は数多く、その奇抜さも一通りではないが、これによって人物の特徴を見分ける目安を色に求めて、赤は忠勇を表し、白は狡猾、青は邪悪、緑は妖怪、黒は愚直、黄は猛烈、金色と銀色は仏祖仙人をそれぞれ表す、といわれている⁸⁾。

色彩の言語用例は、中国の長い歴史の中で、その時々々の文化背景・政治体制・宗教などの影響により移り変わっている。以下、基本的な個々の色について、その様々な意味を多角的に考察してみる。

2. 「紅 hóng」

「紅」は本来、意符の「糸」と音符の「工」から成る形声字である。意符の「糸」は「帛」すなわち絹を表したようで、『説文解字』には「帛の赤白色なり」とある。また段玉裁の注に「粉紅・桃紅なり」とあるように、「紅」はピンク色や淡い赤を意味している。

「蓋頭紅 gài tóu hóng」という言葉がある。中国文化の発祥地であった黄河中流の地域は中原といわれるが、その中心となった場所、洛陽の南の山にまつわる有名な「蓋頭紅」という昔話があった。それは、千年の修行を積んだ美しい桃花の仙女と若い柴刈りの王小が、色欲を貪る妖怪の大きな黒蛇を退治する話である。この故事にならって、現在でも、桃花仙女のように、花嫁が花籠に乗るときには、頭に赤い布の「蓋頭紅」をかぶり、花籠が大樹や大石の前や三叉路を通るときには、緋紅で隠すと同時に「花紅蓋之」と書いた赤い札を貼る風習が残っている。このことから紅ないし赤は、時代と共に縁起をかつぐ、吉祥を表す色となっていくことが分かる⁹⁾。

このように、中国の民話では赤色を鬼神や呪術的な霊力と結び付け、その色を人間の生命力またはその蘇りを象徴する神秘的な色彩として強調している。赤をこのような象徴色として扱った例は古く、たとえば『墨子』には、周の宣王に復讐した杜伯の死霊（鬼神）が「朱衣冠，執朱弓，挟朱矢」（赤い服，赤い冠に赤い弓矢を持つ）と記されている¹⁰。古典と民話には赤色を神秘的な色彩として表現している場合が多く、元代の戯曲『西廂記』では、仲人の役割を果たした者が「紅娘 hóng niáng」と呼ばれている。

近代・現代になると、「紅」は「白」と対照されて用いられ、「紅白 hóng bái」は吉凶を表し、「紅白事 hóng bái shì」は慶弔事を指すようになった。吉祥を表わす「紅」は現代でもよく使われている。

「紅宝书 hóng bǎo shū」は、文化大革命中、『毛主席語録』または『毛沢東選集』を指した。「紅軍 hóng jūn」は、赤軍のことであり、中国の第二次国内革命戦争のとき、中国共産党の指導を受けた「中国工農紅軍」（中国労農赤軍）というように使っていた。抗日戦争時には八路軍，新四軍，中国人民解放軍の前身に使っていたため、中国の本土では革命的なイメージに使われる。「紅色 hóng sè」は、革命の象徴・政治的自覚の高さなど、革命の意欲に燃える意味に使われる。「紅五類 hóng wū lèi」は、労働者・貧農・下層中農・革命烈士・革命的幹部および解放軍の子弟である。このように、中華人民共和国では赤が慶事よりも政治的な意味合いを強めていった¹¹。

中国語を使っている中国本土の人々，台湾に生活している中国人，東南アジア諸国に生活している華僑などは，生活環境が違うので，色に対するイメージも異なる。例えば，中国本土で生活している人々にとっては，「紅」は革命的・積極的なイメージである。台湾で生活している人々はまったく異なる。台湾で生活している人々の中国語では，「紅人 hóng rén」（寵児）「紅利 hóng lì」（純益）「紅潤 hóng rùn」（赤く艶やかである）「紅娘 hóng niáng」（恋の手引きをつとめる女の代名詞）という表現にあるように，その意味は，高貴・愛らしさ，利益を受ける，月下老人などを指している。台湾出版の大辞典・大辞林を調べてみても，革命的という意味は含まれていない。

歴史の観点から見ると，色が時代と共に人のイメージを変えてしまうことが分かる。台湾の国民政府と国民は共産主義に反対し，孫文の三民主義を実施していることから，完全に中国本土のイメージとは分岐している。台湾の中国語には，中国の古くからの紅や赤の象徴的意味が現在もそのまま生きている。

3. 「黄 huáng」

「黄」の字形は，嚙矢あるいは枉矢と呼ぶ尖ったものの先端に火をつけて飛ばす火矢の形を表し，元来象形文字である。先端に火をつけ，重りを後につけた火矢で，光が黄色であるところから「黄色 huáng sè」を表す字となった¹²。

黄色は光輝く物事にしか使われず，それは王の色となった。歴史に黄が登場する最初の代表的な例として，伝説上の帝王の「黄帝（公孫軒轅）」がある。彼は五穀を栽培することを教え，民を慈しんだので，諸侯は彼に帰順した。暴逆な尤と鹿で戦い，これを殺し，諸侯は帝を天子とした。彼は文字・音律・度量衡・医薬・衣服・貨幣を初めて定めたという。中国の文化に初めて光輝を放つ

天子なので、黄帝と名付けられた¹³⁾。それ以後、黄色い天子の服を着ることは、すべての軍人を率いる権力を持つことができることを意味する。こうして「黄色 huáng sè」は、中国の三皇五帝・夏・商・周の時代から清まで、すべての朝廷の「天子」にだけ使える色となった。天子の行く道は「黄道 huáng dào」であり、「黄裳 huáng shāng」は天子の衣である¹⁴⁾。そして「黄宮 huáng gōng」は天子の住まいである。

また黄色は、中央を表す意味にも使われる。儒家の経典『礼記』「月令篇」によれば、赤色を南に、黒色を北に、青色を東に、白色を西に、黄色を中央にそれぞれ配置している。陰陽五行説でも中央の色が黄色である。中国の思想百科全書『呂氏春秋』や『淮南子』でも、赤色（朱雀）を南に、黒色（玄武）を北に、青色（青龍）を東に、白色（白虎）を西に、黄色（尊者）を中央に配することになっている。五行の木・火・土・金・水には、それぞれ青、赤、黄、白、黒が配されている。この際、青は万物の生成、赤は繁茂、白は凋落、黒は死没を意味する。

「黄河 huáng hé」は中国の象徴であり、母なる黄河のシンボルは「黄龍」で表現され、中国の根幹をなすものとなっている。「黄土 huáng tǔ」は、地として最高の色の表現である。

「黄雲 huáng yún」はめでたいしるしの雲、瑞雲であり、また稲や麦などが熟したときの形容に使う。中国の黄綬褒章は業務に精励した功労者に与えられる褒章である。

反面、「黄色」は、海外からの影響で新しい意味を持つようになった。19世紀のアメリカにおいて、『New York Times』は、『New York World Times』との購読争いから、「Yellow Boy」という漫画コラムを開き、またその新聞紙の色は古い感じがしたので、他の新聞社に皮肉られて「黄色新聞 huáng sè xīn wén」と呼ばれた。ここからアメリカでは、「黄」の形容詞的用法が腐敗墮落、特に猥褻を指すようになった。この影響で、中国においても「黄色電影 huáng sè diàn yǐng」は、エロ・グロ映画を意味するようになった。同様に、「黄色新聞 huáng sè xīn wén」は、エロ・グロ記事であり、「黄色歌曲 huáng sè gē qǔ」は、卑猥な歌のことである。「掃黄 sāo huáng」と「打黄 dǎ huáng」は、以上のような人々の心身健康に害をもたらすものを一掃することの代表語である。「黄色」は、墮落した色情を形容する時は「貶義」となり、軽蔑のニュアンスを持つ¹⁵⁾。

しかし、中国の仏教は現代でも黄色を大事にしている。仏僧とチベットのラマ僧の服は黄色である。中国人はこれからもこの黄色の高貴・尊厳の象徴を、最も重要な意味として後世に伝えていくであろう。

4. 「青 qīng」

青は草の芽が伸びた意であり、「草色」の意を示す会意文字になっている。青草・春・少年・若さなどの意味と対応して、草々の芽生えの象徴であり、一番育ち盛りの時期の意味を持つ。

また中国語の青は天の象徴で、天を「青天 qīng tiān」という。中国の五行説で、青を東・春の色に配合したところから、「青春 qīng chūn」は、旺盛な生命力のたとえである。主に人或いは物事の向上している盛んな状態を指す。「青雲之志 qīng yún zhī zhì」は、若い人の夢と希望のシンボルである¹⁶⁾。

青は「蒼 chāng」「碧 bì」「緑 lǜ」とよく似た意味で、古典に使われている。李白の詩、「将進酒」

に、「朝如青絲暮成雪」(朝はまだ若いのに、夕方になるともう白髪になっている。歲月人を待たず)とある。北朝の遊牧民族の民歌で楽府曲辞でもある「天蒼蒼、野茫茫」の中の「蒼蒼」は藍色の表現である。山水田園詩で有名な盛唐の詩人、王維は、西北の辺境に旅立つ人への七言絶句の送別詩に「客舎青青柳色新、……西出陽関無故人」(客舎青々、柳色新たなり……西のかた陽関を出づれば 故人無からん)とうたっている¹⁷⁾。ここでは、「青青」は豊かな生活環境を指しており、荒涼とした西域の何もない生活環境の不便さ、孤独さと対照的に使われている。

中国の蒙古族は非常に青色を大事にしている。モンゴル語で青色は「呼和 Hū hé」と呼ばれる。その色は永遠に強く不動である神の象徴と考えられた。歴史上、蒙古族は自民族を「青蒙古 Qīng méng gǔ」と称し、建立した中央王朝を「青蒙古大帝国 Qīng méng gǔ dà dì guó」と呼んでいた。この王朝名は、永遠に勝利し、千年万代に続いていくことへの願いの象徴であった。この大帝国の旗も深い青色であった。その首都は「呼和巴拉夏蘇」と称されたが、現在でも内蒙古自治区の首府は「呼和浩特 Hū hé hào tè」と称され、青い城の意味である。

蒙古帝国の歴代の皇帝は公文書を深い青の台帳に書いたが、それを「青冊 qīng cè」(青い台帳)と称した。人の名にも多く青が使われている。例えば、「呼和巴拉 hū hé bā lā」は「青虎 qīng hǔ」(青い虎)という意味であり、「呼和少布 hū hé shào bù」は「青鷹 qīng yīng」(青い鷹)という意味である。年に一度、北京で開く蒙古族の大会「那達幕大会」の旗には、深い青が使われる。

また、青は中国では吉祥の意味あい使われることが多い。「青龍 qīng lóng」は、伝説中の神獣で、吉祥の象徴である。『宋書』の「符瑞篇」に、「夏道將興、草木暢茂、青龍止於郊、祝融之神降于崇山」(夏の朝廷が將に興起し、草木もよく茂る。青い龍が郊外に来ている。火の神も崇山に降りている)とある。青い龍が出現すると共に世の中に英明の君王が生まれているというしるしである。空に自由自在に舞う青い龍の図柄が、しばしば君王の服や宮殿の装飾に使われていた。北京の故宮にある九龍壁の龍が、すべて青い龍であることも、吉祥・太平盛世の意味を表している。

中国の湖北省と湖南省にいる少数民族の一つ、土家族は、結婚式において花嫁の顔を覆う布を「夢帕 mèng pà」と呼ぶ。この夢帕は花嫁に吉祥の運命をもたらすといわれている。土家族においては、この夢帕に青の布を使うので「青夢帕」という。土家族の伝説には、ある醜い花嫁が青夢帕をかぶり、花婿の家に赴き、初夜にはずされるときになると、驚いたことに、非常に美しい花嫁になっていたという有名な話もある。このように「青夢帕」は土家族の結婚風習において吉祥の象徴とされている。

「青鸞 qīng luán」は伝説上の鳳凰類の神聖な鳥である。赤色のは鳳凰の鳳であり、青色のは鳳凰の凰、即ち青鸞である。晋(265~460)の時代、王嘉の『拾遺記』「蓬萊山篇」に、「有浮雲之幹、葉青枝紫、子大如珠、有青鸞集其上」とある。この中に青鸞という言葉が出ている。南宋の詩人、范成大(1126~1193)の『謝真人還帰山詩集』に「白鹿行為衛、青鸞舞自閑」というものもある。この詩集の中では白鹿と青鸞とを並列している。どちらも神聖なものの象徴である。青鸞は鳳凰と同類なので祥瑞を象徴している。

「青蛙 qīng wā」は蛙である。中国の満族において、これは平和と豊かさの象徴である。蛙の多いところに天災がないという言い伝えがあるからである。また、蛙のいるところは水と草が豊か

で、人も住みやすいところでもあるからである。中国の古代の薩満（いわゆるシャーマン）の服飾や神事に使う太鼓に、蛙の模様の飾り物が多く見られる。また、中国の少数民族の壮族では蛙が吉祥を象徴しているので、郷土の守護と豊稔の象徴になっている。廣西省の東蘭、巴馬、天峨、鳳山では、毎年、農民暦の正月の元日から十五日まで蛙の節句（敬蛙節・葬蛙節・蛙婆節とも称す）が挙行され、一年の吉凶の占いをしている。そのことから見ても、蛙に対する信仰が強いことが分かる¹⁸⁾。

もっとも、青がすべて吉祥のシンボルであるとは限らない。例えば以下の用例はむしろ貶義語のマイナスイメージの青を表している。

「青面獠牙 qīng miàn liáo yá」は、青い顔をして歯をむいている、すさまじい形相の形容である。心理的な恐怖を与えている感じである。「青黄不接 qīng huáng bù jiē」は、端境期にあること、物が一時欠乏することを表す。「青腫 qīng zhǒng」は、黒く腫れている様子を意味し、「青紫 qīng zǐ」は、うっ血でできる濃い紫色を指している。

5. 「白 bái」

「白」は親指の爪の長く伸びた形の象形文字である。親指は「主人」や「親方」などの意味に用いられてきた。この意味を表した文字が「人」と「白」とからなる「伯」の文字である。また「覇」の字でもある。周の文王を「西伯文王」と称するのは、「西伯」は「西覇」、すなわち「西方の覇者」だからである。

「白」は自然の雲・雪と同じ色で、表層的な印象から、「白璧無瑕 bái bì wú xiá」のように単純・清明・潔白の象徴になっている。一方、中国の古代の陰陽五行説では、西は「白虎 bái hǔ」の管轄で、刑罰の処刑神である。また「白」の季節は秋であり、古代、秋季によく戦争があったため、犯人の処刑も秋にする。その意味から「白」は死亡であり、恐怖感の心理が重ねられている。民間人の葬儀に「白」を使うようになったのは、これに由来する。このように「白」は中国人の観念の中で、相互に矛盾する象徴と意味を持っている。以下、この視点から「白」の表す意味を詳しく探ってみたい。

許慎の『説文解字』に「白、西方色也」と記されている。つまり、「白」は西の方位を指しているということである。

「白」が秋の色を指すことについては、爾雅の『釈天篇』に「秋為白蔵 qiū wéi bái cáng」とある。その『注疏篇』には、「秋之氣和、則色白而収蔵也」（秋の天候が穏やかなので、その雰囲気は白に近く、貯蔵に適している）と記されている。「白」が秋の象徴の一つであることが分かる。

「白」が、喪中の色の象徴である例を探すと、『周礼』「春官篇」に、「鄭司農曰、白為喪」（鄭司農の言うには、白は喪中の色である）と記されている。現代においても、喪服には白が多く使われている。また胸に「白花 bái huā」を付けるか、頭に「白繩 bái shéng」（白い縄）を被り、哀悼の気持ちを表している。「白色消費 bái sè xiāo fèi」は、度を越えた葬儀費用を指している。

「白」は物事を貶める意味に使われている。例えば、「白軍 bái jūn」（反動派軍隊）「白区 bái qū」（反動派の支配地区）「白色恐怖 bái sè kǒng bù」（白色テロ）「白旗 bái qí」（ブルジョア思想や反革

命の象徴) などがある。これらの言葉は、社会的に排斥されることを象徴しているが、現代社会においてよく使われている。また、「白」が貶める意味の言葉として使われている例に「白臉 bái liǎn」がある。京劇で奸雄は顔を白く塗り、かたき役として知られている。「白臉」はまた青二才、若僧の意味でも使われている。ほかに、「白臉狼 bái liǎn láng」は、凶悪な人、忘恩の徒を表している。

一方、「白」は賢明や品行方正の象徴である。『荀子』「榮辱篇」に、「身死而名弥白 shēn sǐ ér míng mí bái」(体が殉死することによって名誉がもっと清らかになる)と記されている。「注疏篇」には「白、彰明也」(白とは清らかさである)と説明されている。

『漢書』「王莽伝」に「黒白紛然 hēi bái fēn rán」(黒と白を分けない乱れている状態)とある。またその注疏には「白黒、謂清濁也」(白と黒は、人格の潔白と卑しさである)とある。すなわち「黒白紛然」とは、清濁のけじめをあいまいにしていることを指している。

さらに「青白 qīng bái」は、政治生活において公正で清廉であることに使われ、「清白 qīng bái」は、日常生活における女性の純潔を表している。

「白寿 bái shòu」は、九十九歳のことを指している。「百」の字から「一」を取ると、「白」の字になるので、白寿という。また九十九になると、髪はほとんど白髪ばかりになり、その命の長寿を祝うという意味で「白寿」の言葉が使われるようになった。「白」という言葉はここにおいて、長期に渡り鍛えられ、生命力の強さや生命の長寿などの「陽」のプラス志向の意味として使われている。

「白璧無瑕 bái bì wú xiá」は、完全無欠や純真無垢のたとえである。璧は一種の美しい玉。瑕は玉にある小さなきず。純白の玉に一点の傷もないこと。主に人や物事が完全無欠であることのたとえに用いられる。称賛的なニュアンスを持っている¹⁹⁾。

中国の五大民族の一つの満族は、白を特に好む。薩満教(シャーマニズム)の人は「白」という色を、天・宇宙・神の火・日月惑星の本来の色としている。日月惑星や火は薩満教の最も崇拝する対象である。日月惑星の輝かしい光は天の目と見倣されている。この例を通して、「白」は崇拝・尊敬されている吉祥の色の象徴であることが分かる。

以上の用例に反して、「白」は何もないという意味から、否定的な「陰」の意味でも使用される。「白字 bái zì」(あて字・誤字)「白費 bái fèi」(むだに費やす)「白吃 bái chī」(むだ飯を食う)「白忙 bái máng」(骨折り損をする)「白花 bái huā」(甘言で喜ばす。でまかせを言う)などの用例がそれである。

以上のように、「白」は陰陽両方の意味に使い分けられている。

6. 「黒 hēi」

「黒」は天玄の代表で、吉祥の色を象徴する。その後、荘嚴の意味に転じて使われた。満族の人は日常生活において、「黒水 hēishuǐ」(黒龍江)に対する崇拝があり、「黒水」は毎日の生活に欠かせない存在であるがゆえに、貴重なイメージである威風の象徴に使われている。

中国で第六番目に人口の多い苗族は「黒」を「腮 sai」と呼び、華麗や荘嚴の象徴にしている。

苗族の人の大半が黒を好む。廣西省、貴州省の苗族の人は藍色の布を黒に染める。また自然の樹汁で布の色に深みを加え、黒光りさせる。その布でできている服飾は特別に人の目を奪う。

薩満教の祭祀において、「黒神 hēishén」は夜の善神であり、人々の長い夜の守り神として祭られている。黒神は背灯祭の祭祀において、主要な神なのである。

古代京劇の中では、黒は臉譜として正直を象徴する。歴史的に有名な「張飛」(忠義)「包拯」(公正無私)「李」(忠臣)の臉譜は「黒」を使う。いわゆる「黒頭 hēitóu」の役であり、有名な裁判官や忠義の役に使われている²⁰⁾。

秦の始皇帝が定めた国の色として、秦の旗はすべて黒の文様を使っていた。「黒旗 hēiqí」は秦の始皇帝の軍隊の旗を指していた。「黒」はここで荘厳さ、厳肅さのシンボルとなる。

「黒」は高貴の象徴に使われている。彝族の支族である納蘇族と諾蘇族は「黒族 hēizú」とも呼ばれている。この部族の人々は碧緑の農作物、翠緑の山林、深い峡谷、凝った服飾、奥深い天地の道理などを、すべて「黒」で形容している。黒に対する称賛的な感情を持っている。

しかし一方で、「黒」は物事の暗黒面を表す。これは中国に限られたことではない。「黒心腸 hēixīn cháng」は、陰険で悪辣な心根を指している。主に、人に対する悪辣な心持ちを指している。憎悪のイメージを持っている。「黒幫 hēibāng」は、秘密の反動組織であり、黒は反動や凶悪の象徴に使われている。「黒道 hēidào」は、誤った道、邪道を指す。「黒路」ともいう。「黒面 hēimiàn」は、秘密社会、犯罪者の社会を指し、「黒貨 hēihuò」は、不正の手段で入手した品、つまり脱税の品や密輸品など、闇の品物を指す。「打黒 dǎ hēi」は、犯罪組織を撲滅する社会運動を指している。

さらに「黒暗 hēi'àn」は、政治の腐敗を喩え、「黒市 hēishì」は、闇市のことである。「黒心 hēixīn」は、腹黒い、陰険で残忍であることを指し、「黒戸 hēihù」は、正式に戸籍に登録されていない世帯のことである。

「黒」は、喪中のことにも使われている。中国の古い風習では夫が亡くなると、妻の方が黒い服を着、顔を覆い、哀悼の心を示す。親が亡くなると家族の男子が黒い布を袖につける風習は、薩満教から伝わってきたといわれている。現在の女性たちは、亡くなった人を追悼するさいに黒い喪服を着用する。黒は、悲しみや冥界の闇や神秘的な世界のことの象徴になっている²¹⁾。

7. 「紫 zǐ」

「紫」は、青と赤のまざった色である。中国語の帝王・神仙などに関する事物によく使われる言葉である。これは「紫」が帝王・神仙の色とされていたことに基づく。「紫」は、吉祥・瑞気の象徴である。例えば、「紫氣東来」(zǐ qì dōng lái)の用語がそれである。

「紫氣東来 zǐ qì dōng lái」の「紫氣」は、かつて宝物の光彩に使われ、吉祥・瑞気の喩えである。『晋書』「張華伝」に、「初、吳之未滅也、斗牛之間、常有紫氣」(当初、吳国がまだ滅びていないとき、北斗七星と牽牛星のあいだによく紫の瑞気が現れていた)と記されている。また唐の詩人、杜甫の『杜工部詩』巻六の「秋興篇」に、「西望瑤池降王母、東来紫氣滿函関」(西に向いた瑤池の所に天界の王母が降臨している。函谷関に満ち溢れているのは東から来る紫の瑞気である)とある。

清代の洪昇の戯曲、『長生殿』の「舞盤集」には、「紫氣東来，瑤池西望，翩翩青鳥庭前降」（紫の瑞氣は東から来る，西に向いた瑤池の所に天界の王母が降臨している。青い鳥も庭にひらりと降りて来ている）とある。

中国の民間風俗の習わしとして，正月に「紫氣東来」と書いてある対聯という飾り物を門に貼る。それによって吉祥の到来を願っているのである。現在も，人々は紫氣を吉祥の象徴として使っているのである。

「紫微 zǐ wēi」は，北斗星の北東にある星座の名である。前漢，司馬遷の『史記』「天官書」と南朝の『宋書』「天文書」では，皇帝の居住している所を紫禁宮と呼んでいる。むかしの人は紫微星城を皇帝の宮殿に喩えなので，帝王宮殿は紫禁宮と称された。帝王の所在するところは紫禁城という。李白の詩『古風三十四篇』に，「白日曜紫微，三公運權衡」（政治清明は紫微の御蔭，国の家老がしっかりと権力の均衡を保っている）と記されている。この「紫微」は朝廷を指している。古典の中では，王宮・皇居・宮城・都などをまとめて「紫微」という²²⁾。

「紫雲 zǐ yún」は，天子・聖人・神仙などの居る所にたなびくという紫色の雲である。紫雲はすなわち瑞雲である。「紫衣 zǐ yī」は，君主の服である。仏教でも紫色の袈裟は最高の僧の代表である。「紫煙 zǐ yān」は，紫色のもやである。また，紫色のもやのたちこめている所で，帝王・神仙などの居所を示す。「紫霞 zǐ xiá」は，紫色のかすみである。神仙の宮殿にたなびくかすみをいい，転じて，神仙の住む宮殿・仙宮・仙界のことを指す。「紫極 zǐ jí」は，天子の居所である皇居，または天子の位を指す。「紫宸殿 zǐ chén diàn」は，唐・宋代の宮殿の名である。諸侯が朝する所である。

中国の苗族は紫を「飴 yí」と呼ぶ。その色が黒に近いからである。苗族が先祖を祭る節句の祭典で，その祭典を行なう祭師の服は紫と決められている。苗族の年配者には紫の服を着用することが好まれている。苗族では，紫が莊嚴・威嚴・慎み・和らぎの象徴になっている。

『論語』「陽貨篇」に，「惡紫奪朱 wù zǐ duó zhū」という用語がある。間色の紫が正色の朱よりも人に喜ばれ用いられることで，「邪佞」（よこしまで口さきのたくみの者）が用いられて，正しい者が遠ざけられることのたとえである。これは，紫を偽りの悪として扱った表現である。しかし，その後の皇帝の服に紫が正色として使われたのは，道教思想で，天帝が天上の「紫微宮」に住んでいると考えられたことから，紫が「吉祥」「高貴」「神秘」の象徴であることに由来しているだろう。

紫は封建帝王と道教の行事においてよく使われていた。帝王の宮殿は「紫宮 zǐ gōng」，道教の『道德経』は「紫書 zǐ shū」，仙人の住んでいるところは「紫台 zǐ tái」という。

現在も北京の中央に位置する明・清の宮殿であった紫禁城に，紫の意味が引き継がれている。「紫」は，その言葉の表層と深層ともに，崇敬・高貴・栄光の代表であり，陽の表現・権威の表現として称賛的なニュアンスを持っている。これは現在でも通用しているといえよう。

8. 「金 jīn」

金の文字の字義は，土中において光り輝くものの意，すなわち一般的に鉱物の金の意である。金は堅固なものという意味があり，またその希少価値も手伝って，長い年月の間に金の色は豪華さを

感じさせるようになった。金は物質的にもっとも安定した金属で、王水にしか溶けない。耐久性と光輝性と希少価値による珍奇性とがある。「金」の用語は総じて貴重さ・堅固さを象徴している。

「金玉良言 jīn yù liáng yán」は、貴重な意見・言葉である。金玉は貴重な宝物、華美な物である。「金科玉律 jīn kē yù lǜ」は、金科玉条、変わらない信条である。「金字招牌 jīn zì zhāo pái」は、昔の商店の金文字看板から転じて、他人にひけらかすための自分の名誉や称号のたとえであり、有名無実なことを指す。「金不换 jīn bù huàn」は、たいへん値打ちのあることを意味する。

金は輝かしい堅固なものなので、ダイヤモンドの中国語は「金剛鑽 jīn gāng zhuàn」である。エジプトのピラミッド「金字 jīn zì tā」は、遠くから見ると漢字の「金」の形になっている。これは不滅の業績の意味でも使われている。

「金玉良縁 jīn yù liáng yuán」は、封建家族の利益に適合する婚姻関係を象徴し、よく使われている言葉である。『紅樓夢』は、主人公の賈宝玉と大金持ちの娘の薛宝釵の結婚を扱う小説である。親は金玉良縁を追求し、それを目標にしているが、結果的には悲劇の終幕になった話である。「金玉良縁」は中国人の理想的な結婚パターンであるが、結婚後の現実の日常生活にも適用しているかどうかは、また別の問題になる。中国人は、「金玉良縁」は必ずしも幸福とイコールであるとは考えていない。

「金玉滿堂 jīn yù mǎn táng」という四字熟語がある。これは、家の中に金も玉もたくさん貯めてあり、財宝が満ち溢れている富の家の象徴である。これは民間の新年用のポスターや切絵によく使われている図案である。言葉の表層でも深層でも良いイメージが伝わって来る希望が溢れる言葉の代表である。

「金」は中国のモンゴル族と土族の審美習俗に一番伝統的な色で、錆びないため、不滅不朽を表し、卓越・威厳・吉祥・高貴・尊敬の象徴である。モンゴル族のホチラチ部族の伝説では、ホチラチ人は金の器から生まれてきた、聡明・勇敢な部族であった。また、チンギスハンの家族は「黄金家族」であり、チンギスハン家族の歴史は「黄金家族史 huáng jīn jiā zú shǐ」と称され、チンギスハンの運命は「黄金之命 huáng jīn zhī mìng」と称されている。

土族の結婚の祝賀会に歌う歌に、「金色的陽光上升了，金色的裙子迎風飄，金色的馬鞍金色的鐙，金色的大路到那金色的城」（金色の太陽が昇り、金色のはかまは風になびく。金色の鞍と金色の装飾、金色の道を通して金色の城に行く）がある。中国の漢民族では、吉祥の象徴色としては赤がその代表であるが、モンゴル族の人々は、それよりもっと輝かしい高貴な金色によって吉祥を代表している。称賛的ニュアンスを持っている。

金色は様々な人間社会で吉祥を代表しているだけでなく、霊的栄光や死後の世界にも使われている。日没時に見られる燦然華麗なる太陽、そして背景の悲しい薄明の銀色の空。こうした印象から、金は銀と共に、仏像や西方浄土の装飾にもよく使われている。中国人の間では、亡き人のためにたくさんの冥銭を燃やすが、その冥銭に金紙と銀紙を貼ってある。金の純粋と銀の慈悲は、この世とは別の世界に漂う神の不可思議な力を表す色でもあるのかも知れない。

9. 「銀 yín」

銀は白色の光沢ある貴金属である。銀のようなつやのある白い色も銀色という。銀の特質として、金属のうちで電気および熱の伝導率が最も大きいことが挙げられる。このことが皇帝の食器や箸として利用された理由である。また、銀は硫黄や硫化水素などを含む毒物に触れると黒色の硫化銀に変化する性質から、毒物の鑑定にも適している。ここから、中国文化の中で、銀はこのような陰謀を防ぐ役割の意味もある。以下、「銀」の象徴的意味を具体的に見てゆこう。

「銀錠 yíng dìng」は、中国古代、民間で自由に鑄造した銀塊である。民間での習慣として、銀錠を元宝と称する。この銀錠の「錠 dìng」の字の発音が「定 dìng」と同じなので、諺の「必定如意 bì dìng rú yì」（順調）とつながりができる。銀錠は民間の凶案集で吉祥を象徴している。絵の中に銀錠や筆や靈芝を描くと、吉祥如意の新年用凶案になる。『紅樓夢』の第18篇に、賈母がプレゼントをもらったときに、「原来是“金玉如意”（富貴順調）各一柄，……紫金“筆定如意”（順調）十錠，“吉慶有余”（吉祥充滿）銀錠十錠」（なるほど金塊と靈芝がそろっている、筆十本、銀塊十本、縁起ものをたくさんもらった）と記載されている。銀錠は人に喜ばれる吉祥を象徴する縁起ものとして使われている。

「銀刺梳 yíng cì shū」は、中国南方の苗族語では「亜尼不 yà ní bù」と呼ぶ。これは女性の髪の毛に付けている飾り物のことである。苗族の女性が野獣に襲撃されるときや、乱暴な男性に侮辱されるときに、自衛する武器として使われている。最初は「刺梳」であったが、時代の移り変わりで「銀刺梳」になった。「銀刺梳」は、高雅華麗・神聖不可侵の象徴に使われている。

「銀帽独辮 yíng mào dú biàn」は、雲南省元陽市の哈尼族における服飾風習である。未婚女性の象徴として使われ、それによって既婚女性との違いを示す。一種のパターン認識である。

「銀帽花 yíng mào huā」は、苗族語では「么榜尼 yāo bǎng ní」と呼ぶ。子供の帽子のことである。帽子の周りに九つの銀仏があり、七つの鈴が付けてある。丸い銀の鉄片を貼ってある。銀仏は神の守護を象徴し、丸い銀の鉄片は太陽の温かさを象徴している。七つの鈴は魔除けの象徴である。

「銀河 yíng hé」は、時間とともに動き、回る。中国の詩・詞にたくさん使われている。この天の河の別名には、天漢・天河・銀漢などがある。

「銀袍 yíng páo」は、孔雀のイメージをとった衣裳である。雲南省徳宏の景頗族の服飾である。当地の猟師が各種の美しい鳥類の羽毛を集め、服の作りに沢山の銀色の糸を使っているので、「銀袍」の名になった。これは、冠婚葬祭時に女性の服として使われ、富・華麗・美しさの象徴である。

「銀雀鳥 yíng què niǎo」は、雀の一種である。甘肅省裕固族の伝説によると、この鳥は人に吉祥をもたらすという。

「銀鎖鍊 yíng suǒ liàn」は、中国南方の苗族における伝統的な装身具である。銀でできているネックレスに銀の文字盤「長命富貴」と銀の鍵をぶら下げて、それを子供や女性の首飾りとして付けると、悪霊や魔物や妖怪等から弱い子供と婦女を守り、また健康を促進させるという。安心・安全

中国文化における色彩の象徴的意味に関する考察

といったニュアンスを持っている。

おわりに

これまで見てきたように、様々な色に様々な言葉と意味がある。色はその言葉の文化背景と社会環境によって、また各時代の平和状態あるいは戦争状態によっても、変化が生じることが理解される。以下に、中国語における色彩関係の言葉を一覧化し、各々の色の代表的な象徴内容をまとめてみる。

【中国語における各色の代表的な象徴内容】

紅	南の方位。吉事。吉報。お祝い事。めでたいこと。寿。勢い盛んなさま。忠臣義侠。人気者。初婚。幸運。幸せ。招待。熱狂する。情熱。活気。誠心。愛情。喜び。歓喜。神秘的。合格。安産。共産主義。革命的。挑発的。闘争的。怒ること。
黄	真ん中の方位。夏の季節。中国の古代文明。天子。皇帝。皇室。高貴。尊厳。成熟。明るさ。明朗。希望。発展。広大さ。光明。歓喜。快活。黄泉。優柔。みだらな。卑猥。
青	東の方位。春の季節。芽生え。少年。若さ。若い人の夢と希望。永遠に強く不動。永遠の勝利。吉祥。神聖。平和と豊かさ。廣大無辺。調和。知性。自然。公正。
白	西の方位。秋の季節。単純。清明。貯蔵の時期。喪中の色。哀悼の気持ち。清潔感。明白。素朴。基礎。基本。女性の純潔・潔白。公正で清廉である政治。生命の長寿。公正。平和。賢明。品行方正。白色テロ。ブルジョア思想。反革命。反動的。若僧。凶悪な人。忘恩の徒。無駄。骨折り損。
黒	北の方位。冬の季節。夜の善の神。正直忠臣の殺人。威風。秦の始皇帝。秘密の反動組織。邪道。凶悪の組織。秘密社会。犯罪者の社会。脱税の品や密輸品。闇の品物。地獄の暗黒。政治の腐敗。闇市。陰険で残忍であること。厳肅さ。荘重さ。沈黙。悲哀。不正。罪悪。失敗。
紫	天界。北斗星の北東にある星座。天帝の居所。王宮。皇居。宮城。天子・聖人・神仙の居所。君主の服。仏教の袈裟。神仙の住む宮殿・仙宮・仙界。めでたいこと。楽しいこと。天子の位。天子の詔勅書。唐・宋代の宮殿。道教の寺院。高雅。気品。神秘。優美。吉祥。
金	光輝くもの。神仏世界。豊かさ。明るさ。財宝。良縁。吉祥。高貴。尊敬。荘厳。優雅。興奮。頂点。最高の尊厳。不滅の業績。
銀	吉祥充満。順調如意。神仏世界。魔除け。健康の守り神。神仏の守護の力。財。高貴。美しさ。未婚女性。華麗。神秘。荘厳。天の川。持続。沈着。

長い中国人の歴史と生活習慣の変容に伴って、感情表現を「色」に託す言語には諸相がある。現代風にいえば、「色」の色相・明度・彩度の違いであるが、その変化に託された心の様相には微妙な変化がある。

中国語を使っている中国本土の人々、台湾に生活している中国人、東南アジア諸国に生活している華僑などは、生活環境が違うので、色に対するイメージも異なる。本論の「紅」の節で論じたように、中国本土で生活している人々にとって、「紅」（赤）は革命的・積極的である。それに対して、台湾で生活している人々は異なるイメージを持っている。台湾の人々の中国語では、「紅人 hóng rén」「紅利 hóng lì」「紅潤 hóng rùn」「紅娘 hóng niáng」という表現にあるように、高貴、愛らしさ、受益、月下老人の意味などに使われている。

「色」は最初、人間が物を分別する状態を形容することばであった。「色」に関して、風土・風俗習慣・民族性などにより、「表層」と「深層」の文化背景を研究することによって、より一層、その地域と時代の特質を理解することができるであろう。運動会には、よく見られる各国の国旗があ

り、その国旗の「色」によって、込められている民族意識が表現されている。国旗の「色」に代表される用語を理解し、把握できれば、その国に友好感を抱き、その国の文化を学びやすくなるであろう。

1911年に勃発した辛亥革命により、1912年には、中華民国が樹立された。中華民国は、北京を首都とし、その国旗は、漢、満、蒙、回、蔵（チベット）の民族の共和を表す五色である、赤、黄、藍、白、黒の横縞の五色旗であった。1917年に政権の主導権争いにより、孫文を中心に中華民国軍政府が南方の広州に組織され、北方の中国人民解放軍政府と対立した。南北両政府の間には、内戦が展開された。広州の中華民国軍政府は1923年には、五色旗に対抗して、赤地の左上角に青天白日旗をあしらった青天白日滿地紅旗を掲げた。青天白日旗は藍地の真中に光芒を放つ白日を置いたものである。これは現在の国民党の党旗である²³⁾。このように、国旗の「色」は内面の深層意識への呼びかけによって、国民にある目的を達成しようとすることもある。一方、中華人民共和国の国旗は、1954年9月20日に公布された憲法第104条に基づいている国旗である。共産主義を代表する赤地の左上部に五つの金星を配したもので、大小五つの星は「中国人民の革命的大団結」を象徴するものだ、と毛沢東によって説明されている。

このように、様々な感情を「色」で表す言葉には、愛憎や評価が鮮明に映し出されている。それゆえ色に関する中国語は正確に理解し、慎重に使わなければならない。また、色に関する言葉は、時代の変遷、社会的経済的構造や生活様式の変化により、変容していくのである。

〔注釈〕

- 1) 金谷 治・佐川 修編訳『荀子』（全釈漢文大系7・荀子・上）集英社、1973、37ページ。
- 2) 程 亦 珍・戴孝先刻編・阮元審定『十三経注疏2・詩経』芸文印書館印行、1813、241ページ。
- 3) 赤塚 忠著『莊子』（全釈漢文大系 17・莊子・下）集英社、1977、127ページ。
- 4) 李 慕 如編『楽府』（大夏経典35）大夏出版社、1994、15ページ。
- 5) 王 国 璋編集『現代漢語褒貶義詞用法詞典』国際文化出版公司、1995、4ページ。
- 6) 同注3、赤塚 忠著『莊子』（全釈漢文大系 17・莊子・下）集英社、1977、127-130ページ。
- 7) 城 一夫『色彩の宇宙誌——色彩の文化史』明現社、1995、23-27ページ。
- 8) 福永光司『中国における色彩の哲学』（「中国京劇団」）日本文化財団、1982、65-68ページ。
- 9) 丁 秀 山著『中国の冠婚葬祭』東方書店、1994、186-194ページ。
- 10) 劉 継 華訳注『墨子』（中国名著選訳叢書8）錦繡文化企業出版、1993、124-125ページ。
- 11) 丁 秀 山著『中国の文化と伝統』金星堂、1997、1-2ページ。
- 12) 鎌田 正・米山寅太郎『漢語林』大修館書店、1992、1157ページ。
- 13) 謝 澄 平著『中国文化史・新編』（第一冊）、青城出版社、1985、33-34ページ。
- 14) 香坂順一編『中国語辞典』光生館、1985、531-533ページ。
- 15) 劉 一 玲編『1994漢語新語』北京語言学院出版社、1996、39ページ。
- 16) 同注5、『現代漢語褒貶義詞用法詞典』国際文化出版公司、1995、317ページ。
- 17) 蘅塘退士編『大夏経典12・唐詩三百首』大夏出版社、1995、228ページ。
- 18) 劉 錫 誠編『中国象徴辞典』天津教育出版社、1991、224-226ページ。
- 19) 同注16、『現代漢語褒貶義詞用法詞典』国際文化出版公司、1995、8ページ。
- 20) 韓 鑾 堂編『中国文化』国際文化出版公司、1995、318-326ページ。
- 21) アト・ド・フリース著・山下圭一郎訳『イメージ・シンボル事典』大修館書店、1998、65-66ページ。

- 22) 劉錫誠編『中国象徴辞典』天津教育出版社, 1991, 353ページ。
23) 『現代用語基礎知識』自由国民社, 1998, 645ページ。

【参考文献】

- 楠山春樹著『中国の人と思想——老子』集英社, 1994年。
野村茂夫編『老子』(鑑賞中国の古典4)「老子・荘子」角川書店, 1988年。
吉川幸次郎著『論語上・下』中国古典選1・2 朝日出版社, 1996年。
木村英一・鈴木喜一編『論語』(中国古典文学大系3)「論語・孟子・荀子・礼記抄」平凡社, 1970年。
福島久雄著『孔子の見た星空』大修館書店, 1997年。
和田武司・市川 宏編『中国の思想別巻——中国の故事名言』徳間書店, 1997年。
蕨内清編『墨子』(中国古典文学大系5)「韓非子・墨子抄」平凡社, 1968。
平岡武夫・宇野精一編『墨子』(全訳漢文大系18)「墨子・上」, 集英社, 1974。
城 一夫著『色彩博物館』明現社, 1997年。
丁 秀 山著『中国の冠婚葬祭』東方書店, 1994年。
香坂順一編著『現代中国語辞典』光生館, 1982年。
聶 鴻 音・傅 徳 林主編『当代漢語辞典』北京師範大学出版社, 1993年。
林 連 通・張 饒 卿編著『新編漢語多用辞典』中国, 社会科学文献出版社, 1994年。
陳 国弘編著『最新国語大辞典』台湾, 世新出版社, 1983年。
山田勝美著『漢字の語源——角川小辞典1』角川書店, 1976年。
京大東洋史辞典編纂会『新編東洋史辞典』東京創元社, 1991年。
大河内康憲著『中国語の諸相』白帝社, 1997年。
常 敬 字著『語用・語義・語法』中国, 杭州大学出版社, 1996年。
中嶋洋典『五色と五行——古代中国点描』世界聖典刊行協会, 1986年。
中国大百科全書総編集委員会編集『中国大百科全書』(語言・文字)中国大百科全書出版会, 1988年。
辛 夷・成 志 偉編『中国典故大辞典』北京燕山出版社, 1991年。